

路地風景の発見に関する基礎的考察

前田 翔三¹・中井 祐²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:shozo@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

近年、路地空間や路地風景に魅力を見出す動きが活発である。文学、写真作品から実際のまちづくりや設計まで路地を好意的に捉える動きは枚挙に暇がない。しかし、かつて路地は都市計画において災害時危険空間、自然発生的で計画外の道、モータリゼーションを許容しない、あるいは一般的なイメージで言えば貧しい、閉鎖的、近所つき合いに煩いといったネガティブイメージが大勢を占める場所であったと言える。それではいつから、そしてなぜ路地に対する評価に大きな転換が訪れたのであろうか。本研究においては、路地風景がいつから、そしてなぜ、価値を持つようになったのかという問いに対して仮説と考察を提示する。

キーワード：路地、風景、発見

1. はじめに

(1) 背景および目的

近年の路地ブームとでも言えるような路地に関する様々な言説や現象を見ていると、路地風景や路地空間に関するいくつかの問いが成立する。

—「路地風景は昔から良きものとして見られていたのだろうか？」

—「路地風景が発見された、あるいは復権したとすれば、その背景として人々の風景観がなんらかの理由でシフトしたからではないのか？」

—「一体なぜ、そしていつから路地の魅力、価値は見出されたのか？」

このような疑問を抱くのも、路地というのは近代都市計画の中で、あるいは一般の人々の意識レベルにおいても接道条件を満たさない、災害時危険空間、自然発生的で整理されていない前近代的な空間、閉鎖的、プライバシーがないといった認識のもとで軽んじられてきたはずの存在であるからである。

仮に、路地に対する人々の価値判断、風景観がシフトしたと言えるならば、それはいつで、いったいなぜなのだろうか。

この疑問が本研究の背景であり、この疑問に答え得る仮説を提示し、その蓋然性を示すことが本研究の目的である。

(2) 既往研究

1990年代に入る頃から路地空間におけるあふれ出し現象を研究対象としたものや、各地の魅力的とされる路地やその周囲の街区の都市構造を研究対象としたものを代表として路地空間や生活道路に関する研究は様々な切り口で数多くなされてきた。また、商業空間や集合住宅の設計に路地的な要素を盛り込んだり、月島や法善寺横丁などを代表とした路地空間を実際のまちづくりに活かそうという試みもこれまでなされてきた。これらは現在進行形の話でもある。しかしながら、いつから、そしてなぜ多くの人々が路地に魅力を見出しているのかという最も根本的な問いに答える研究はこれまでされてこなかった。

(3) 本研究における路地の定義と分類

様々な人が様々な定義を用いて路地を論じているが、本研究においては様々な路地の定義を緩やかに包む以下の定義を路地の定義として用いる。

両側を最低一つずつ以上の建築物に挟まれた、車の通過交通のない、幅員4m以下の道を本研究における路地とする

そのうえで、路地をその空間的性質、性格から大きく3つに分類する。

a. 生活系路地

地域住民の生活に根ざした路地であり、少なくとも一

軒以上の住居の入口に面している路地を生活系路地とする。園芸や自転車、洗濯物など、生活の匂いのするものが置かれていることが多い。



図-1 生活系路地の例，本郷四丁目
b, しつらえ系路地

多くは古くからの花街，料亭，あるいは茶室につながる道となっている路地。植木や花，飛び石が設えられ，水まきなども日常的に行われるような，客をもてなす空間として意識され，洗練された路地をしつらえ系路地とする。



図-2 しつらえ系路地の例，京都産寧坂界隈
c, 商業地，繁華街系路地

商業地や繁華街などに存在する路地で，商店が建ち並んでいたり，飲食店が軒を連ねている路地を商業地，繁華街系路地とする。



図-3 商業地，繁華街系路地の例，谷中すずらん通り

(4) 本研究において対象とする路地

本研究においては上記の分類のうち，生活系路地について取り上げ，それに関する風景観の変化について論じる。近年評価に大きな変化が見られるのは生活系路地である為である。

2. 路地風景の発見に関する仮説

研究に際して，まず生活系路地風景の発見に関する仮説を立て，それを検証するというスタイルをとった。

まず仮説として以下の二つの仮説と一つの補仮説を立てた。

仮説1

生活系路地空間，あるいは生活系路地風景の魅力や価値は，昔から一般に認められていたものではなく，高度経済成長期において見出され，その後，バブル崩壊後の近年に至り大きく広まったものである。

仮説2

生活系路地風景に価値を見出す動き（以後，生活系路地風景発見とする）の要因として生活系路地の喪失，生活系路地風景の破壊（注1）と共に，路地風景を古き良き地縁的コミュニティあるいは古き良き地縁の人間関係の象徴として見出す心的現象がある。

補仮説

昨今路地が好意的に論じられる背景には，意図的にせよ，結果的にせよ，路地の良い面，悪い面のうち，良い面を大きく扱い，悪い面を隠蔽する路地イメージの“捏造”がある。

3. 仮説の検証

仮説を検証する為に都市社会学，その中でも地域内の人間関係や人間関係に関する社会的な要因を論じている研究，言説をレビューすると同時に，ニッコール年鑑に掲載された写真作品を検証した。

ニッコール年鑑とは，光学機器メーカーNikonが主催する写真同好会ニッコールクラブが1958年度より年に一冊出版している出版物であり，内容はその年に投稿されたアマチュア写真家の写真作品のうち，作品として優秀であると審査されたものを纏めたものである。プロの写真家による招待作品も載っている。ニッコールクラブの発起人としては木村伊兵衛，土門拳，三木淳らが名を

連らね、極めて由緒正しい写真同好会であると言うことが出来る。

ニッコール年鑑に掲載されるためには、アマチュア写真家が自身の作品の中からこれと思う作品を選び、投稿し、それがプロの写真家である審査員に評価されなければならない。このことからニッコール年鑑に掲載されている写真作品は一定の価値のある作品であると認めることとした。ニッコール年鑑の中にはスナップ写真、風景写真や、ヌード写真、ポートレイト、動植物を対象としたものなど、様々な写真作品が含まれているが、スナップ写真や風景写真はどの年もかなりの数含まれている。この中で、生活系路地に関する写真作品の数と質がどのように変遷してきたかを検証することで、生活系路地風景に関する風景観の変遷を追う手段とした。

a, ニッコール年鑑における生活系路地写真作品数の変遷

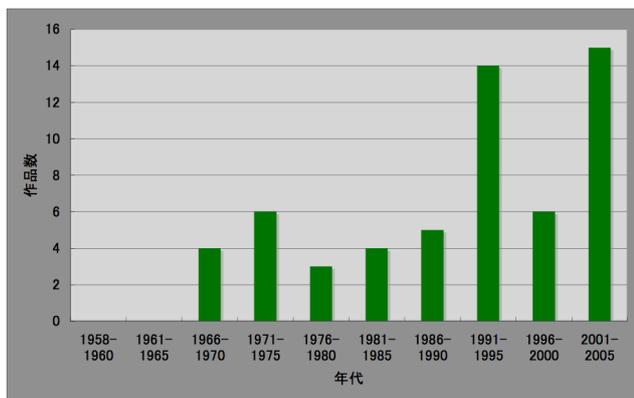


図4 年代別生活系路地 写真作品数 (総数57点)

このデータを見ると、生活系路地風景を写した写真作品は1965年までは、まったく登場せず、1960年代の後半から現れてくるのが分かる。また、1990年前後を境に生活系路地を写した写真作品の数が大きく増えている。これらは仮説1を裏付けるデータであると言える。90年代後半に生活系路地に関する作品数が減っているに関しては、現在のところ説明できないが、2001年以降、再び路地の写真が増えている。これは昨今の路地ブームに重なる。

b, 写真作品の内容について

写真作品の内容やその変遷についても検証した。内容については、主な被写体となっているもの、構図の中で重要視されているものによって写真のテーマを分類したところ生活系路地に対する喪失感や生活系路地風景そのものに対するノスタルジーがテーマとなっていると認められる作品が1996-2005年の十年間で4点(1996-2005の作品総数は21点)存在することが確認された。

また、1996-2005年の十年間で生活系路地に関する写真作品総数21点のうち地縁的な人間関係をテーマとするものが9点、家族や子供をテーマとした作品が10点、両者を合わせて14点(一作品の中で両者がテーマとなっている作品が5点含む)見られた。仮説では生活系路地風景が象徴化されていると述べ、何のシンボルであるかということに関して古き良き地縁的コミュニティ、地縁的人間関係のシンボルであると、やや狭めて論じていたが、子供や家族をテーマとした生活系路地写真作品も半数近く存在することを考えると、地縁的な人間関係でなく、血縁的な人間関係も含めて考える必要が生じた。つまり、仮説2は以下のように書き換えられる。

仮説2'

生活系路地風景に価値を見出す動きの要因として生活系路地の喪失、生活系路地風景の破壊と共に、生活系路地風景を「地域環境や血縁、地縁の人間との親密で相互扶助的な関係」の象徴として見出す的現象がある。

また、一口に地縁や血縁がテーマと言っても、その内容に年代による傾向があることが見て取れた。具体的には80年代の後半から、井戸端会議のような場景や地域の大人と子供が同じ場を共有し、親密な様を見せるような、路地における良好な人間関係、地縁血縁のコミュニティを強調する作品が多く現れるようになり、近年では、デジタル合成により路地におけるそのような情景を人為的に作り出した作品までもが現れるようになった。このことから、80年代後半から、路地を舞台とした良好な地縁血縁の人間関係を希求する心が多くの人に共有されていったことが伺える。



図5 60-70年代の作品例



図-6 80年代後半以降の作品例



図-7 近年見られるデジタル合成作品の例

4. まとめと考察

ここまでの検証と、旧来より積み重ねられてきた都市社会学的な知見や路地に関する研究を複合すると、路地風景の発見に関して以下のような考察を持つに至った。

生活系路地風景発見の背景にあるものとして生活系路地空間の喪失、あるいは破壊が考えられるが、それに加えて、路地風景、路地空間が地縁血縁に基づく良好な人間関係のシンボルとして眺められ、価値を見出されている面がある。

極めて概略的に言えば、近代化、特に戦後の高度成長期において、都市化が急速に進む中で、都市社会学者の言う相互扶助システムから、専門処理システムへと生活様式のシフトが必然として起きた。言い方を変えれば、都市化が進む中で個人化、私化が進行した。町内会や自治会、さらに小さな単位で言えば隣近所といった旧来の人間関係のありかたも、解体の流れに吞まれていった。

地縁血縁的な人間関係だけでなく、就業形態のありかた、プライバシー志向、その他さまざまな要因の中で、都市に生きる人々の人間対人間の関係はかつてのような密度を失っていったと言える。その反動として、人との交流や、濃い人間関係に対する希求、飢えのようなもの

が、社会的な要請、個人的な願望両面から生じた。さらにバブル崩壊、その後の経済不況、もっと大きな枠組みで言えば戦後の都市の流れを形作ってきた都市成長・発展シナリオから都市衰退・再生シナリオへのパラダイムのシフトが現在起こっている。そのなかで人々の価値観も変換を迫られており、相互扶助的な社会システムのあり方に対する見直しや人間回帰の現象も今まさに起こっていることである。

その中で、旧来の地縁血縁的なコミュニティに対する価値の見直し、あるいは憧憬のようなものが高まり、地縁的あるいは血縁的で、人との交流や濃密な人間関係を未だ維持している（ように見える）生活系路地空間やその眺めである生活系路地風景を、社会、あるいは自らが希求しているもののシンボルとして価値あるものとして見ている人が多く、それが近年の路地ブームにつながっているのではないだろうか

なお、本研究の仮説で述べていることはあくまで一定の蓋然性をもつに仮説に過ぎず今後も考察を高次なものに高めていく必要があることを付記しておく。

参考文献

- 1) 材野博司：都市の街割，鹿島出版会，1998
- 2) 篠原修：街路の格とアメニティ，LATSS Review，1990
- 3) ニッコールクラブ：ニッコール年鑑1958-2005
- 4) 岡本哲志：江戸東京の路地，学芸出版社，2006
- 5) 西村幸夫編著：路地からのまちづくり，学芸出版社，2006
- 6) 上野・谷根千研究会：新編・谷根千路地辞典，住まいの図書館出版局，1995
- 7) 佐藤秀明：日本の路地裏，ピエブックス，2005
- 8) 加藤嶺夫：東京懐かしの街角，河出書房新社，2001
- 9) 加藤嶺夫：東京消えた街角，河出書房新社，1999
- 10) 水野歌夕：京の路地風景，東方出版，2005
- 11) 布川秀男：もう取り戻せない昭和の風景（東京編），東洋経済新報社，2004
- 12) 菌部澄，神崎宣武：失われた日本の風景，河出書房新社，2000
- 13) 青木義次，湯浅義晴：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し，日本建築学会計画系論文報告集，1993
- 14) 倉沢進：社会目標としてのコミュニティと今日の問題，都市問題vol189. no. 6，1998
- 15) 原田理恵：住民運動から見た地域社会再生へ

- の視点, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 16) 竹中英紀: コミュニティ行政と町内会・自治会, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 17) 山本賢治: 都市生活様式とコミュニティ, 鹿児島経済大学社会学部紀要, 1991
- 18) 山本賢治: 都市生活様式とコミュニティ, 鹿児島経済大学社会学部紀要, 1991
- 19) 倉沢進: 社会目標としてのコミュニティと今日の問題, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 20) 瀬戸一郎: 90年代後期東京におけるコミュニティ政策の変換, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 21) 原田理恵: 住民運動から見た地域社会再生への視点, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 22) 竹中英紀: コミュニティ行政と町内会・自治会, 都市問題vol189. no. 6, 1998
- 23) 奥田道大: 1990年代の都市コミュニティ論, 都市問題研究 vol149. no11, 1997
- 24) 中川剛: 町内会への回帰, 都市問題研究vol145. no5, 1993
- 25) Youngseok Kim 高橋鷹志: 密集住宅地の「住宅群」における路地と隙間の役割に関する研究 日本建築学会計画系論文集第469号 87-96, 1995
- 26) 福田陽之輔, 内田文雄: 路地・隙間をかいしたコミュニティに関する研究—山口市旧市街地を対象として—, 日本建築学会中国支部研究報告集第25巻, 2001
- 27) 青木義次, 湯浅義晴, 大佛俊泰: あふれ出しの社会心理学的効果, 日本建築学会計画系論文集第457号, 1994